思春期の孤独感に関する研究

大阪教育大学 工 藤 力

A study of the feeling of loneliness in pubertal youth

Tsutomu Kudoh (Department of Psychology, Faculty of Education, Osaka University of Education, Tennoji-ku, Osaka 543)

The purpose is to examine the factor structures of situational events regarding loneliness in pubertal youth and their coping behaviors. A loneliness scale for use with youth was developed, and applied to 199 seventh grade children. Thirty items were for the assessment of situational events regarding loneliness, and 51 items were for the assessment of their coping behaviors to the loneliness. The major findings were as follows: Eight independent factors were extracted for situational events regarding loneliness, while 12 independent factors were extracted for the coping behaviors toward loneliness. Children with strong loneliness score showed tendency to coping with deviant behaviors. The reliability of the loneliness scale was discussed with respect to alpha coefficients, test-retest correlations, split-half method, and the GP analysis. Use of these tests gave ample evidence for the reliability of the scale.

Key words: puberty, loneliness, situational events of loneliness, coping behaviors, loneliness scale, deviant behaviors.

孤独感は広く行き渡った感情反応であり、身震いするほど強烈で不快な経験を当事者に与え、アルコール依存や自殺、犯罪などと結びつき我々の生活を直接脅かす。他方、孤独感の研究は、健全な社会的関係の有り様を示唆し、対人的親密さや友情など対人魅力の研究に新たな視点と洞察を与える。こうした理由から、孤独感に関する研究は近年特に注目され、数多くの研究が生み出されてきた（たとえば、Peplau & Perlman, 1982; Russell, Peplau, & Ferguson, 1978; Weiss, 1973）。Peplau & Perlman (1982) は、1932 年から 1981 年までの 50 年間に出版された孤独に関連する著書目録を作成した。それらは 287 点にのぼる。そのうちの 143 点は、1975 年以降の 6 年間に出版されたものである。孤独感とは、人の社会的関係のネットワークにおける願望（欲求）レベルと達成（充足）レベルの間の食い違いから生ずる強烈で不快な感情であると定義づける認知的アプローチが現在もっとも有力な理論的立場である。そこで、孤独感の喚起とそこに働く諸変数、並びにそれらの相互の仮説的關係は、Fig. 1 のごとくまとめることができる。最近の孤独感に関する研究の多くは、孤独感に及ぼすこうした変数の効果を検討・吟味している。本邦においても、これらの変数の機能を部分的ではあるがそれぞれ検討する研究が、いくつか試みられてきた（工藤・西川, 1983; 工藤・西川・熊取谷, 1985; 工藤・長田・下村, 1984; 諸井, 1984; 落合, 1982）。

ところで、孤独感は思春期の子供達の間ですでに経験される（Sullivan, 1953）。しかし、思春期および青年期

の者を対象とした孤独感に関する体系的研究は極めて少ない（Brennan & Auslander, 1979; Collier & Lawrence, 1951; Ostrov, 1978）。Moore & Schultz (1983) は、“残念なことに、青年期の人たちの孤独感に対する反応、そして解釈の仕方および対処の方略に関する研究が、これまで全く行われてこなかった。（p.96）”と述べている。そこでまず、思春期に位置する子供達が孤独感を経験する直接的（状況的）出来事は一体どのような事柄なのか、また、孤独感に陥った時、彼らは何をやるのかなどの側面を探究する必要があると考えられる。

本研究の主な目的は、思春期の子供達が孤独感に陥る直接的出来事の因子構造を明らかにし、彼らが孤独感を癒し克服するために行う対処行動の種類と性質を明確に

Fig. 1. 孤独感に作用する諸変数間の仮説的シエマ（工藤, 1984）.

することである。本研究では、この他に中学生用の孤独感尺度の作成が試みられ、その信頼性があわせて検討される。

方 法

調査対象 川西市立S中学校1年生 199名（男子107名、女子92名）である。

質問紙の構成

a) 孤独感尺度 Russell, Peplau, & Cutrona (1980) の UCLA 改訂版孤独感尺度の邦訳版は、工藤・西川 (1983) により信頼性と妥当性の検討を経て作成されたが、本研究ではこれの中学生用を作成し直し使用した。原尺度の回答方法は四件法であるが、中学生用は三件法（はい、いいえ、どちらでもない）に直され、各質問項目は中学生向けに平易な文章表現に改められた。教示文は“つぎの文章に書かれていることを、つね日ごろどのくらい感じているか（思っているか）答えて下さい”というものである。項目番号 2, 3, 7, 8, 11, 12, 13, 14, 17, 18 の 10 項目では、“はい”には3点、“どちらでもない”には2点、“いいえ”には1点が与えられ、残りの項目にはこれと逆の得点化がなされた。各被験者の孤独感の尺度得点は、最も強い 60 点—最も弱い 20 点の範囲内に位置づけられた。

b) 孤独感の直接的出来事 本研究の被験者とは異なる中学1年生男女 85 名を対象に“あなたがとてもさびしいと感じた出来事をくわしく説明し、それはいつどこで起こり、それには誰が関係していたか”という回答自由な形式の質問が行われた。回答が整理され、出現頻度の上位から 30 項目が孤独感の出来事の項目として選択された。本研究では、“あなたがひとりぼっちでさびしくてたまらないと感じたのはどんな場合でしたか”という質問により、各被験者は、これら 30 項目のうちから該当する項目を自由に選んだ。選択された項目には1点を与え、得点化の処理がなされた。

c) 孤独感の対処行動 予備調査をした 85 名の中学生に、“あなたはさびしさをまぎらすために、どのような行動をとりましたか”という質問を行い、これへの回答を整理し 23 個の対処行動項目が作成された。これに加えて、工藤・長田・下村 (1984) の用いた一般的対処行動項目から 16 項目、さらに、羽仁 (1983) から 12 個の逸脱行動項目が抽出・付加され、最終的に、対処行動項目は合計 51 項目で構成された。本研究では、被験者達に“あなたがひとりぼっちでさびしくてたまらないとき、その気持ちをまぎらす（なくす）ためにどんなことをしますか”という問いにより、51 個の対処行動項目の各々に対して、三件法（そうする、そうしない、どちらともいえない）で回答するように求めた。得点化は、“そうする”には3点、“そうしない”には1点、“どちら

Table 1

孤独感の直接的出来事の項目

1. 家族の人が死んでしまったとき
2. 両親が離婚してしまったとき
3. 飼っていたペットが死んでしまったとき
4. 友だちが死んでしまったとき
5. 友だちが転校して友だちと離れてしまったとき
6. 私が転校して友だちと離れてしまったとき
7. 小学校を卒業して友だちと離れてしまったとき
8. 成績のことで親に叱られたとき
9. 生活態度のことで親に叱られたとき
10. 成績のことで先生に叱られたとき
11. 生活態度のことで先生に叱られたとき
12. 生活態度のことでクラブの先輩に叱られたとき
13. 親とケンカしたとき
14. 兄弟（姉妹）とケンカしたとき
15. 友だちとケンカしたとき
16. 親が私と約束したことを守らなかったとき
17. 友だちが私と約束したことを守らなかったとき
18. 先生が私と約束したことを守らなかったとき
19. 家族の人と一緒にいて何気なく考えたとき
20. 学校にいて何気なく考えたとき
21. 外をひとりで歩いていて何気なく考えたとき
22. 親があれこれと命令したとき
23. 友だちがあれこれと命令したとき
24. 親にできのよい兄弟（姉妹）と比べられたとき
25. 先生ができのよい生徒とそうでない生徒を区別したとき
26. 家族の人に無視されたとき
27. 友だちに仲間はずれに（無視）されたとき
28. 家の中にひとりぼっちでいたとき
29. 入学式のとき、まわりが知らない子ばかりだったとき
30. 街で家族の人とはぐれたとき

ともいえない”には2点をそれぞれ配点し処理された。なお、孤独感の直接的出来事の 30 項目と対処行動の 51 項目は、Table 1 と Table 2 にそれぞれ示されている。

結 果 と 考 察

孤独感尺度の信頼性

a) 尺度水準での検討 尺度の内的整合性を検討するため、各項目間の相関行列から α 係数が算出された。 α 係数は 0.847 であった。折半法に基づく信頼性係数は 0.837 であった。これらの結果は、尺度の等質性が充分保たれていることを意味している。さらに、再検査信頼性係数が算出された。199名の被験者のうち57名に、本研究の1週間後に孤独感尺度のみを再調査したが、再検

Table 2
対処行動の項目

1. じっとがまんする	18. 動物と遊ぶ	35. 映画をみる
2. 寝る	19. ラジオをきく	36. なにかに熱中する
3. 食べる	20. 忘れるようにする	37. 父親に暴力をふるう
4. 本（マンガなど）を読む	21. 楽器をひく	38. 母親に暴力をふるう
5. スポーツをする	22. なにか物をつくる	39. 友だちに暴力をふるう
6. 石をける（物にあたる）	23. 買い物をする	40. 先生に暴力をふるう
7. テレビを見る	24. 歩きまわる	41. タバコをすう
8. 歌をうたう	25. なにもしないでいる	42. 学校をさぼる
9. 友だちに電話する	26. 料理をつくる	43. 家出をする
10. 音楽を聞く	27. おおいにさわぐ	44. 夜遊びをする
11. 友だちを遊びにさそう	28. 楽しいことを思い出す	45. 人の物をぬすむ
12. 泣く	29. もの思いにふける	46. 異性とつきあう
13. 作文（日記・手紙など）を書く	30. 家族と話す	47. ゲームセンターで遊ぶ
14. 大声を出す	31. 知らない人に話しかける	48. バイクを運転する
15. 人の多いところへ行く	32. ひらきなおる	49. 化粧（けしょう）をする
16. 外出する	33. ひとりっきりでいる	50. パチンコをする
17. 勉強に打ちこむ	34. 友だちに相談する	51. シンナーなどをすう

査信頼性係数は 0.743 ($p < .001$) であり、尺度の安定性は充分認められた。

b) 項目水準での検討 199 名の尺度得点分布から孤独感高群と低群を抽出し、尺度の項目ごとに t 検定による GP 分析を実施した。尺度得点の上位 27.6% (55 名, レンジ: Min 33 点—Max 52 点) を高群とし, 下位 25.6% (51 名, レンジ: Min 20 点—Max 23 点) を低群とした。 t 検定の結果, Table 3 のごとく 20 項目のすべてに高群と低群の間に有意差が検出された。これら 20 項目は, 孤独感を測定する上で高い弁別力のあることを示している。

孤独感の直接的出来事の因子構造

孤独感を喚起させる出来事の因子分析は, 以下の手続きで行われた。まず, 各被験者の 30 の出来事の項目の評定得点から項目間積率相関行列を算出し, 主因子法により因子を抽出した。さらにバリマックス法により因子軸の直交回転を行い, 因子構造の単純化をはかった。ここでは固有値 1.250 以上という基準を設け, 共通因子の数を 8 因子と決定した。これらの 8 因子は全分散中の 50.0% を占め, かなりの説明力をもつと思われる。

得られた主な結果は, Table 4 の通りであった。因子負荷量の絶対値が 0.400 以上の項目を高い負荷量をもつ原因項目とみなし, 各因子の解釈が試みられた。表から明らかなように第 1 因子で高い負荷量を示す 2 項目は, 具体的かつ直接的な原因がなく孤独を感じることを示しており, “理由なきさびしさ” 因子と命名した。第 2 因子で高い負荷量を示す 2 項目は, 親や兄弟姉妹とのトラブルに根ざす孤独感であり, “(家庭内) いさかい” 因

子と命名した。第 3 因子の 2 項目は, 友達や家族の死に基づくものであり, “親しい人との死別” 因子と命名した。第 4 因子は, 卒業による友達との物理的別離によるものであり, “友達との別離” 因子と命名した。第 5 因子の 3 項目は, 生活態度や成績に関して先生や親から諷められたことにその原因があり, “叱責” 因子と命名した。第 6 因子の 2 項目は, Significant others が行う兄弟 (姉妹) 間の比較や約束の不履行から生じており, 親や先生からの “突き放され” 因子と命名した。第 7 因子は, 親が約束を守らないの 1 項目であり, “親への不信” 因子と命名した。第 8 因子は, 友達の命令の 1 項目であり, “友達からの圧迫” 因子と命名した。このように, 被験者の生活空間を反映して, 彼らの孤独感の直接的原因は, おもに家庭と学校での対人関係性に由来していることがわかる。

Peplau & Perlman (1979) は, 社会的関係における達成レベルの低下から生ずる 4 タイプの孤独感の原因要因を指摘した。それらは, 愛情関係の亀裂・崩壊, 友達や家族との物理的別離, 信頼度のような関係性における質的満足度の低下, 社会的地位の変化である。本結果は, 社会的地位の変化の要因を除いてこれらの原因要因とはほぼ対応している。第 2 因子, 第 5 因子, 第 6 因子, 第 7 因子, 第 8 因子は, 愛情関係の亀裂・崩壊, もしくは関係性における質的満足度の低下に由来する孤独感である。第 3 因子と第 4 因子は, 友達や家族との物理的別離である。社会的地位の変化に対応する因子だけが見出されていない。Rappoport (1972) は, 青年期の社会的役割は一種の “リンボー” であり, 青年達は社会に所属し

Table 3
中学生用孤独感尺度と GP 分析結果

孤独感尺度 20 項目	GP 分析 t 値	p
1. 私は自分のまわりにいる友だちと仲よくいっていると思う。	7.09	<.01
2. 私は友だちとのつきあいが無いと思う。	5.50	<.01
3. 私にはたよりにできる友だちがだれもいないと思う。	6.16	<.01
4. 私はひとりぼっちではないと思う。	3.69	<.01
5. 私は仲のよい友だちの気持ちや考えていることがよくわかると思う。	6.64	<.01
6. 私は自分のまわりにいる友だちと似ているところが多いと思う。	6.51	<.01
7. 私は今、だれとも仲よくしていないと思う。	5.07	<.01
8. 私の興味（きょうみ）や考えていることは、私の友だちのところがうと思う。	9.22	<.01
9. 私は外に出るのが好きな人間であると思う。	4.54	<.01
10. 私には仲のよい友だちがいると思う。	6.37	<.01
11. 私はなにかまはずれにされていると思う。	6.61	<.01
12. 私の友だちとのつながりは、うわべだけのものであると思う。	7.02	<.01
13. 私をよく知っている友だちはだれもいないと思う。	7.44	<.01
14. 私は友だちから離れていると思う。	5.18	<.01
15. 私はその気になれば、友だちとつきあうことができると思う。	4.08	<.01
16. 私を本当にわかってくれる友だちがいると思う。	8.76	<.01
17. 私はたいへん、はずかしがりやなのでみじめであると思う。	4.22	<.01
18. 私にはあいさつぐらいする友だちはいるが、気持ちや考えていることまで知っている友だちはいないと思う。	7.54	<.01
19. 私には話しあえる友だちがいると思う。	5.08	<.01
20. 私にはたよれる友だちがいると思う。	7.83	<.01

Table 4
孤独感の直接的出来事の因子分析結果

第1因子：理由なきさびしさ因子	寄与率	14.5%	固有値	4.35
学校にいて、何気なく考えたとき				.612
外をひとりで歩いていて、何気なく考えたとき				.460
第2因子：（家庭内）いさかい因子	寄与率	6.4%	固有値	1.91
親とケンカしたとき				.757
兄弟（姉妹）とケンカしたとき				.528
第3因子：親しい人との死別因子	寄与率	5.7%	固有値	1.72
友だちが死んでしまったとき				.811
家族の人が死んでしまったとき				.544
第4因子：友達との別離因子	寄与率	5.5%	固有値	1.64
小学校を卒業して友だちと離れてしまったとき				.539
第5因子：叱責因子	寄与率	5.0%	固有値	1.50
生活態度のことで先生にしかられたとき				.750
生活態度のことで親にしかられたとき				.619
成績のことで親にしかられたとき				.419
第6因子：突き放され因子	寄与率	4.6%	固有値	1.37
親にできのよい兄弟（姉妹）と比べられたとき				.599
先生が私と約束したことを守らなかったとき				.513
第7因子：親への不信因子	寄与率	4.3%	固有値	1.29
親が私と約束したことを守らなかったとき				.767
第8因子：友達からの圧迫因子	寄与率	4.2%	固有値	1.25
友だちがあれこれと命令したとき				.664

ているとの明確な感覚、愛着感、参加感をもちえず、社会に認められた役割を剝奪されていると述べている。思春期の被験者達に社会的役割や地位の変化に起因する孤独感が現出しないことはむしろ当然といえよう。ところで、孤独感の直接的出来事の因子として最も寄与率の高い第1因子は、既述の4タイプとは全く異質な因子であった。これは特定の理由がなく、ただ漠然と集団内で感ずる孤独感を意味する。Moustakas (1972) は、実存主義的立場から孤独分析にアプローチし、人間存在それ自体が孤独なのであり孤独経験は自己との出会い、対面の機会を与える創造的経験であると主張する。思春期に位置する被験者達は、自我確立の萌芽という心的に動揺しやすい状況にいる。第1因子の理由なきさびしさ因子は、唯一独自性の意識のめざめといった自己との対決を示す被験者達の発達的特質に随伴して生ずる原因因子といえるのではないだろうか。

なお、本研究結果は孤独感の直接的(状況的)出来事(原因)の分析であり、孤独感の持続的原因の因果分析でない点に注意しなくてはならない。この両者は区別して論じられるべきである。

孤独感の対処行動の因子構造

対処行動に関する因子分析は、原因の因子分析と同じ手続きで行われた。固有値 1.250 以上という基準も同一である。共通因子の数は 12 因子となった。これら 12 因子は全分散中の 58.5% を占め、かなりの説明力をもつと思われる。

Table 5 には因子負荷量の絶対値が 0.400 以上のものが示されている。表から、第1因子で高い負荷量を示す6つの対処行動項目は、手軽にできる気分転換の行為を示しており、“身近な気晴らし”因子と命名した。第2因子で高い負荷量を示す5項目は、法律に抵触する反社会的行動であり、“違法行動”因子と命名した。第3因子の3項目は、親や友達への暴力行為であり、“暴力”因子と命名した。第4因子の3項目は、子供達の間でもっともポピュラーな問題行動を示しており、“非行行動”因子と命名した。第5因子の4項目は、主として音楽に関連する活動が中心になっており、“音楽的活動”因子と命名した。第6因子の3項目のうち主な項目は、個人の力では変化不可能な状況と、したがって、忘却する以外に為す術がないといった諦めを示唆しており、“諦観”因子と命名した。第7因子の4項目は、自己を顕示させ権威への攻撃や社会ルールに対する挑戦的行動を意味しており、“反抗行動”因子と命名した。第8因子の2項目は、友達に接触する行動であり、“対人接触”因子と命名した。第9因子の2項目は、積極的に孤独感を癒したり対処の行動を始発させる意志をなんら示しておらず自我の浮遊状態であり、“無為”因子と命名した。第10因子は我慢するの1項目であり、文字通り“忍耐”因子と命

名した。第11因子の4項目は、外出し町中を歩きまわる活動であり、“彷徨”因子と命名した。第12因子の3項目は、気晴らしのための享乐的な遊びを意味しており、“娯楽的活動”因子と命名した。

孤独感に対する反応ないし行動は、このように多種多様にわたっているが、寄与率が2桁なのは第1因子のみである。各因子をみてもみると、反社会的行動カテゴリーに入る因子が、第2因子、第3因子、第4因子、第7因子の4因子と多い。また、非社会的行動カテゴリーに入る因子は、第6因子、第9因子、第10因子の3因子である。他方、適応的な社会的行動カテゴリーに入りうる因子は、残りの5因子にすぎない。結果から明らかなごとく、孤独感を癒しそれを克服するために採られる行動カテゴリーの上位は、違法的、暴力的、反抗的な逸脱行動が占めている。Rubin (1982) は、“子供の孤独感は大人の孤独感と細かい点で相違点があるが、基本的には同じ経験であり満足のいく社会的ネットワークを欠いた大人と同様に、友達のいない子供達は不安感、退屈感、疎外感といった苦痛な孤独の感情を経験しうる。(p.266)”と述べた。得られた結果は、友達との正常な連帯感が被験者の子供達の間でいかに希薄で欠落しているかを如実に示すものであった。対人接触因子は、身近な気晴らし因子や音楽的活動因子といった手軽にできる気分転換的対処行動よりもさらに下位にあり、寄与率の点ではむしろ無為因子や忍耐因子とほぼ同じであった。

Peplau & Perlman (1982) は、孤独に対処する方略として、A) 人の実際の社会的関係を変えること、B) 人の社会的欲求又は願望を変えること、C) 社会的不足に関する知覚された重要性を低めること、によって満足のいく社会的関係を確立することができると述べている。この孤独感に対する対処方略に準拠して本研究結果を検討してみよう。まず、第1因子、第5因子、第11因子は、仲間と楽しむ活動を選ぶより、むしろ1人で享受できる活動や仕事を行うものであり、Bのカテゴリーに該当する。第8因子と第12因子は、既存の社会的ネットワークの活用であり、Aのカテゴリーに相当する。第6因子、第9因子、第10因子は、厳しい現実を受容しそれに同調するよう現状や自己の感情を評価する基準を変えるものであり、Bのカテゴリーに包含できる。これは、Weiss (1973) の述べた持続的孤独に対して採用される行動型である。第2因子、第3因子、第4因子、第7因子は、社会的関係性のもつ重要性に価値をおかず、苦痛な感情から注意を逸らす不適応(maladaptive)な活動への従事であり、Cのカテゴリーに入れることができる。

このように、本研究結果は、Bのカテゴリーに6因子、Cのカテゴリーに4因子、Aのカテゴリーに2因子というように、Bの社会的欲求又は願望を変える対処の仕

Table 5
対処行動の因子分析結果

第1因子：身近な気晴し因子	寄与率 12.6%	固有値 6.44
食 べ る		.556
本（マンガなど）を読む		.545
なにか物をつくる		.510
ラジオを聞く		.500
テレビを見る		.460
なにか（趣味など）に熱中する		.457
第2因子：違法行動因子	寄与率 8.8%	固有値 4.47
人の物をぬすむ		.935
タバコをすう		.683
バイクを運転する		.496
パチンコをする		.467
シンナーなどをすう		.428
第3因子：暴力因子	寄与率 6.9%	固有値 3.50
母親に暴力をふるう		.888
父親に暴力をふるう		.822
友だちに暴力をふるう		.418
第4因子：非行行動因子	寄与率 5.0%	固有値 2.53
家 出 を す る		.837
学校をさぼる		.690
夜遊びをする		.678
第5因子：音楽的活動因子	寄与率 4.1%	固有値 2.07
楽 器 を ひ く		.681
大 声 を 出 す		.525
歌 を う た う		.514
作文（日記・手紙）を書く		.403
第6因子：諦観因子	寄与率 3.8%	固有値 1.93
ひらきなおる		.600
忘れるようにする		.538
家 族 と 話 す		.513
第7因子：反抗行動因子	寄与率 3.4%	固有値 1.75
先生に暴力をふるう		.858
化 粧 を す る		.767
パチンコをする		.605
バイクを運転する		.572
第8因子：対人接触因子	寄与率 3.1%	固有値 1.58
友だちに電話する		.749
友だちに相談する		.667
第9因子：無為因子	寄与率 2.9%	固有値 1.49
なにもしないでいる		.582
寝 る		.434
第10因子：忍耐因子	寄与率 2.8%	固有値 1.42
じっとがまんする		.694
第11因子：彷徨因子	寄与率 2.7%	固有値 1.39
人の多いところへ行く		.652
外 出 す る		.565
買 い 物 を す る		.533
歩 き ま わ る		.450
第12因子：娯楽的活動因子	寄与率 2.5%	固有値 1.28
友だちを遊びにさそう		.558
ゲームセンターで遊ぶ		.434
泣 く		-.450

方が目立つが、全体的には Peplau & Perlman の孤独感に対する3つの対処方略にほぼ対応しているものである。ところで、逸脱行動によって孤独感に対処しようとする者は、恐らく他の対処行動を行う者より一層強い孤独感を抱いている者ではないかと想像される。そこで、孤独感の強度と対処行動の様態の関連性が検討された。

孤独感尺度作成の過程で GP 分析が試みられたが、そこで採用された基準により、孤独感高群 ($N=55$) と低群 ($N=51$) が抽出された。各対処行動項目について両群間の t 検定が行われた。結果から、孤独感高群が孤独感低群よりも有意に実行する対処行動は、学校をさぼる ($t=2.047, p<.05$)、人のものをぬすむ ($t=2.022, p<.05$) の2項目であった。逆に、孤独感低群が孤独感高群よりも有意に行う対処行動は、本 (マンガなど) を読む ($t=2.719, p<.01$)、テレビを見る ($t=2.679, p<.01$)、音楽を聴く ($t=1.768, p<.10$)、友達を遊びに誘う ($t=2.722, p<.01$)、ラジオを聴く ($t=3.866, p<.01$)、家族と話す ($t=2.588, p<.02$)、何か (趣味など) に熱中する ($t=1.890, p<.10$) の8項目であった。この結果は、思春期の子供のうち、孤独感の強い者は孤独感の対処行動として逸脱行動をとりやすく、孤独感の弱い者は身近な気晴らしや娯楽的活動にたずさわりやすいことを示している。非行や違法行動を行う子供達の心理的背景には、明らかに強い孤独感が存在し、そうした逸脱行動が孤独感の払拭の試みであることを本研究結果は強く示唆している。なお、孤独感の強度と孤独感の直接的出来事の関連性、並びにその出来事と対処行動の様態の間の連合関係などの分析は、今後の検討課題として残されている。

引用文献

- Brennan, T., & Auslander, N. 1979 *Adolescent loneliness: An exploratory study of social and psychological pre-disposition and theory*. Vol. 1. Colorado: National Institute of Mental Health, Juvenile Problems Division.
- Collier, R. M., & Lawrence, H. P. 1951 The adolescent feeling of psychological isolation. *Educational Theory*, 1, 106-115.
- 羽仁説子(編) 1985 子ども白書 草土文化
- 工藤 力 1984 孤独の対処行動に関する研究 関西社会心理学研究会第94回発表資料
- 工藤 力・西川正之 1983 孤独感に関する研究(I)——孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討—— 実験社会心理学研究, 22, 99-108.
- 工藤 力・西川正之・熊取谷由季央 1985 孤独感に関する研究(II)——孤独感に関する因果帰属の検討—— 大阪教育大学紀要, 34, 149-157.
- 工藤 力・長田久雄・下村陽一 1984 高齢者の孤独に関する因子分析的研究 老年社会科学, 6, 167-185.
- Moore, D., & Schultz, N. R. 1983 Loneliness at adolescence: Correlates, attributions, and coping. *Journal of Youth and Adolescence*, 12, 95-100.
- 諸井克英 1984 孤独感とベットに対する態度 実験社会心理学研究, 24, 93-103.
- Moustakas, C. E. 1972 *Loneliness and love*. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall.
- 落合良行 1982 孤独感の内包的構造に関する仮説 教育心理学研究, 30, 233-238.
- Ostrov, E. 1978 Loneliness and the adolescent. *Adolescent Psychiatry*, 6, 34-50.
- Peplau, L. A., & Perlman, D. 1979 Blueprint for a social psychological theory of loneliness. In M. Cook & G. Willson (Eds.), *Love and attraction*. Oxford: Pergamon. Pp. 101-110.
- Peplau, L. A., & Perlman, D. 1982 *Loneliness: A sourcebook of current theory, research and therapy*. New York: John Wiley & Sons.
- Rappoport, L. 1972 *Personality development: The chronology of experience*. Glenview, Ill: Scott, Foresman.
- Rubin, Z. 1982 Children without friends. In L. A. Peplau & D. Perlman (Eds.), *Loneliness: A sourcebook of current theory, research and therapy*. New York: John Wiley & Sons. Pp. 255-268.
- Russell, D., Peplau, L. A., & Cutrona, C. E. 1980 The revised UCLA Loneliness Scale: Concurrent and discriminant validity evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 472-480.
- Russell, D., Peplau, L. A., & Ferguson, M. L. 1978 Developing a measure of loneliness. *Journal of Personality Assessment*, 42, 290-294.
- Sullivan, H. S. 1953 *The interpersonal theory of psychiatry*. New York: Norton.
- Weiss, R. S. 1973 *Loneliness: The experience of emotional and social isolation*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

——1985. 10. 21. 受稿, 1986. 7. 12. 受理——